

審査の結果の要旨

氏名 呂 小耘

本論文は、幼児期から児童期への移行期にあたる5歳児クラスの幼児たちが、相互に交わしあう保育室での談話が年間にどのように時期により変容していくのかを、参加の構造や発話応答連鎖などから明らかにした研究である。論文は、全5部8章から構成される。

第Ⅰ部第1章では、幼児の会話の発達に関し、2者間対話から3者間対話、さらに3者以上の対話へと変化していく様相を先行研究から概括し、また小学校以上の教室談話研究知見をもとに、検討すべき視座として、話し合いのテーマやタイプ、集団内での個々の発話数や宛先の変化、発話間の連鎖や発話機能、発話の役割、談話展開を支援する保育者の援助という5点の具体的検討課題を導出している。続く第2章では、5歳児9名から成る1クラスを9ヶ月間(33日間)にわたり観察して得られた69の談話場面の中から、保育者の指名がなく、テーマにもとづく話し合いが行われた58場面を抽出し、それらを年間3期の時期区分で分析することや、その分析方法について論じている。

第Ⅱ部では、集団レベルでの9カ月間の発話の時期的変化を数量的に分析している。第3章では、話し合い場面を問題解決の話し合いと自由な話し合いに2分類し、前者では保育者が聞き役になり幼児が主導して話し合いを進めるのに対し、後者では中期から保育者と幼児が対等な話し合いを進めることが可能となることを示している。第4章では、集団のネットワーク分析により談話への参加の仕方に子どもによりタイプがあること、また宛先が保育者に宛てる発話からクラス全員に宛てる発話へと変化していくことを記述している。

そして第Ⅲ部では、幼児同士の発話の応答連鎖に注目し、第5章では、応答連鎖の分析から、保育者は発話者の発話をすぐに評価せず応答を促すこと、また中期頃から幼児は自分の直前の発話者への応答だけでなく、発話者以外の他児や集団全体へ宛てた応答が行われること、話し合う問題タイプにより異なる応答の機能や連鎖の展開がみられることを明らかにしている。また第6章では、発話数の多い2名の幼児に注目し、問題解決時に非当事者として当事者に働きかけるタイプと、当事者だけではなく集団全体にも働きかけ、また話し合いルールの維持発話等を担うタイプの2つのタイプの相違を見出している。

そして第Ⅳ部では保育者の支援に注目し、第7章では、保育者は幼児が集団の談話に参加できるよう言い換えや質問などの発話形式を用いて支援を行い、その支援によって幼児自身が保育者の言葉に疑問を呈したり、話し合いを自ら進められるようにしたりしていることを示している。最後に、第Ⅴ部第8章総合考察では、それまでの5研究の知見をもとに、時期によらず安定して見られる特徴と時期によって変化する宛先や応答機能などの特徴があることなどを整理し、本研究の意義と課題を論じている。

本論文は、特定少人数クラスを参与観察し、個々の幼児とその関係に焦点を当てた談話場面をエピソードとして記述することにより、教室談話研究の知見を保育談話に適用した新たな保育研究の可能性を拓いている。さらに本研究の知見を一般化していく等の課題は、今後に残されているが、幼児期から児童期への移行期に関する独自の研究視座を提供した論文として評価された。よって、本論文は、博士(教育学)の学位を授与するに、ふさわしい水準にあると判断された。